

聖書 アモス書8章4〜7節、ルカ福音書16章1〜13節

ルカ福音書16章1節以下に登場する不正な管理人は、一口で言うならば、悪賢い人物です。1節にあるように、ある金持ちの管理人が無駄遣いしているということを聞きつけた主人は、この管理人を呼びつけて「お前について聞いて聞いていることがあるが、どうなのか。会計報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない」と告げたのでした。これまでの会計の報告を出すように言い渡されました。

すると、この管理人はこの切羽詰まった状況の中で、さらなる不正を計画します。報告書を出すまでは彼には大きな裁量権が与えられていました。そこで主人に貸しがある人を呼び出して、証文の額を少なく書き直させて、その減額によって恩を売り、主人から管理人を首になっても、自分が生きてく道筋をつけたのです。当時の律法によれば、同胞のユダヤ人に貸す場合は、利息を取ってはならなかったのです。けれども、現実には、利息という形ではなく、油100バトスという証文は、実際には80バトスを借りたのですが利息に相当する20バトスを足した100バトスを貸した形の証文にしたのです。このような裁量権を主人の管理人は発揮して、主人が利息を手に行っていることが表に出ないように、自分が盾になつて裁量権を發揮していたのです。

こういう前提があることを勘案して、このイエスの譬えを読まなくてはならないのです。管理人は、どのような条件で主人の財産を貸すかの裁量があつたので、主イエスは「この管理人の抜け目のないやり方をほめて、不正の富で友をつくることで、「金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる」(9節)と不思議なことをイエスは言われました。お金がなくなったときというのは、生きていく手段を失ってしまった時のことでしょう。

この管理人は解雇された後で、債務を免じられた人が自分を家に迎え入れてくれるだろうと期待したのですが、イエスは、それを9節で「永遠の住まいに迎え入れられる」という話に転換しています。つまり、神の国に迎え入れられる話に変えられているのです。イエスは、この管理人の行為を、任された裁量権を有効に用いて神の国に入るための賢い行動の一つと解釈したのでした。

イエスがなぜこのような話をしたのかを考えてみたいと思います。当時のパリサイ派の人たちや律法学者たちが、律法に忠実であれば自動的に神の国に入ることができると考えていて、自分が正しい行動をとつてさえいれば、神の国に入ることができると単純に考えていたのです。そのために、神の意志を考えることがなくなり、自分が正しい行動さえしていれば神の国に入れると考えていたので、神の御旨を深く考えることができなくなつていたのです。そういう状況が支配的な中で、イエスは神の国に入るために賢い行動をどのようにとるべきなのかを考えてみるこの大切さをここで言っているのです。

また、私たち信仰者の人生は神の目的を果たすために備えられたものだということを頭に入れておかないと、本日の話は理解しづらと思います。つまり、私たちが預けられたものをどのように管理するかが問われているのです。この管理人は主人の財産を無駄遣いしていると訴えられたのです。訴えたのはサタンの仕業と考えると、この管理人の賢い行動はサタンの攻撃に対する防衛的なものとなります。

さて、イエスは10節〜11節で「ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値のあるものを任せるだろうか」と言います。もし、富がごく小さな事、不正にまみれた富、他人のものだとすれば、何が「大きな事、本当に価値あるもの、何が自分自身のものになる」のかと問うています。つまり、富をどのように理解すべきかが、ここで問われているのです。

「ごく」の富というのは、単純にお金や富のことではありません。神から委ねられている私たちの人生のことです。この人生をどのように神の御旨に沿うように用いていくかということが信仰者の管理の事柄として示されてい

るのです。富を管理することが問われているのですが、それは神から委ねられている人生をどのように管理していくかという問いがここで提起されているのです。

不正にまみれた富とは、神の御旨に反する状態の人生ということが言えるでしょう。問題は今時点で神の御旨に沿っていない人生をどのように管理して、自分の人生を神の御旨に沿う形でととのえていくかということなのです。お金に縛られ、お金に振り回される現実には誰にでもあるわけです。しかし、その富、つまりは自分の人生をどのように神の御旨に沿うように管理していくかは信仰者にとって本質的な事柄です。

けれども、注意したいことは、13節のイエスの言葉の解釈です。「どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んだ方を愛するか、一方に親しんだ方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」というイエスの言葉です。

この言葉で、神と富を対立的にとらえる理解が一般的だと思われがちです。「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」とあります。これらの言葉を額面通りに理解するならば、神に仕えることと、とみに使えることは両立しないと読み込んでしまいます。

しかし、本日の聖書箇所でのこれまでの説明でわかるように、ここで言われているお金や富は私たちの人生のことです。しかも、神から委ねられている人生は、神から委ねられているというように、神と神とを対立的にとらえてはいないことは明らかです。神が私たち信仰者に委ねた人生をいかに管理していくかということが主題なのです。ですから、神と富は対立的な関係にはないのです。

たとえば、隣人愛は神が人間を愛することが基盤にあつて、神から与えられたその愛を基盤にした隣人との関係性を形作っていくことが唱えられているわけです。ですから、神から委ねられている人生と神に仕えることがどちらか一方を選択しなさいという意味ではなく、神から委ねられた人生を自分の意志通りに自由勝手に自己決定するのではなくて、神の御旨を意識しながら、自分の人生を形作っていくことが、ここで強調されているのです。²

一般に神に仕えることと、富に仕えることは対立的に理解します。確かに、富に翻弄されるのが私たちの人生ですし、現実の生活でお金のことを考えないと生活は必ず破綻を招きます。ですから、富に仕えることと神に仕えることは対立するものとだという先入感が生まれるのですが、私たちの生活は神から委ねられたものなのです。委ねられた人生というのは、神が人間の主体性を尊重しながら神の御業を働かせる器が人生ですから、この神の御業がどのようなかたちで自分の人生に働いているかを見定めなければなりません。

神の御業がどのようなときに働いているのかを見定めることができるかは、自分の主観的な感情や、自分が捕らわれている事柄から自由になつて、自分の今の苦しみとか悲しみ、憤りや怒りなどのやりきれない事柄にどのような神の御旨が隠されているかを考えてみる必要があります。神は無駄な人生の歩みを強いたり、無意味な人生をもたらすお方ではなく、必ず、苦しみや悲しみには神の御旨が示されているのです。神は相働きて人間に益をもたらすお方であり、無暗に苦しみや悲しみを与えるお方ではありません。必ず、神のメッセージが隠されているのです。

そのような神の御旨が現わされるように、祈り求めて生きたいものです。最後に、神から委ねられた人生を生きていくためには、やはり、神を自分の価値観の中で第一に据えなければなりません。神が自分の選択肢の中で常に一番にしていることで、富や社会的な承認欲求などは相対化されます。私たちが生きる上でいろいろな葛藤に陥ってしまうのは、例えば神と富を対立するものと捉えてしまうから苦しくなってしまうのです。神を自分の価値観の中で最上位においていけば、悲しみも苦しみさえも、相対化されるのです。この相対化することによって、神が自分の人生にどのような御業を働かしているのかが見えてくるのです。